

李時雨

辺野古の風景には傷痕があります。

誰かが私に問いかけました。体の中心はどこだと思いますか？ 私は頭と心を思い浮かべました。するとその方は「体の中心とは痛みのあるところだ。どこかが痛めば全身の神経が痛むところに集中し、痛みが治るまで体の中心になるのだ。」と答えました。

私たちの体の中心が痛むところであるならば、社会の中心も痛みのあるところだと考えることができるでしょう。世界の中心も、戦争や飢餓と貧困があるところだと考えることができるでしょう。なぜならその痛みが治るまで、決して世界は平和で調和的だということができないからです。

痛みを共にすることは、たやすいことではありません。犠牲と献身が必要で、あるときは不利益を被ることもあります。しかし痛みを共にすることは、世の中の中心に自らを置くことです。辺境中の辺境である辺野古は、最も大きい痛みを共にすることで世界の中心になりました。英語にsubjectという言葉があります。subとjectが結合した言葉です。すなわち、「下に投げ捨てられたもの」という意味です。「足元に投げられた者」なので、この言葉は近代以前には、「しもべ、被造物」との意味で使われました。けれども近代革命を経て、この単語は「主人」「主体」という正反対の言葉になりました。絶壁で木の枝を掴んでいる者は、一切れの糸でさえ頼りにしなければならない哀れな境遇にあります。それが被造物であり、しもべです。しかしその木の枝さえ手放すことができる勇気は、大の男だけが出せる、という言葉があります。木の枝から、精一杯ぶら下がったすえに落ちる人と、自ら手を放して落ちる者の違いが、被造物と主人の違いです。下に投げ捨てられる者と、自ら下にわが身を投げる者の違いがこの単語の意味を正反対にさせたのです。皆さんは誰かに押されてここへ投げ込まれたのではありませんでした。自らわが身をここに投げたので、被造物でなく主人になったのです。

辺野古は米軍基地反対運動の歴史上最も長く闘ってきました。

待つことが切実な者は遠くを見えています。アダムスミスは「国富論」の中で、労働者が過激なのは、資本家のように余裕ある暮らしができないからだを指摘しました。これを悪用し、支配勢力は抵抗勢力を性急に追い立てる方法を用いました。韓国の闘いで「粘り強い奴が勝つ」という掛け声があるのは、まさに内なる性急さ抑えるためのものでした。大衆運動の速度を調節することは重要な政治力量です。一方で、私たちは遠くを見ても、その時々物事の手順を確立するための緊張感を緩めてはならないでしょう。中国の古典「禮記」に「物事が順序を得れば、それを礼と呼ぶ」とあります。礼とは自らを堂々と保ち、相手を感じさせる規範です。故に物事を順序立てて行えば、堂々と相手を説得する可能性も高まります。物事の順序を正確に把握することは、高度の政治闘争なのです。

辺野古には、闘いのほぼすべての経験が融合しています。

莊子の木鷄という故事があります。木鷄は木彫りの鷄です。

闘鷄を献上された王様が、紀恂子という闘鷄の名人にこの鷄を鍛えてほしいと頼みました。十日

たち紀悄子を訪ねて「できたか？」と尋ねると「まだまだです。こいつは相手の鶏が仕掛ける前に、先に仕掛けます。だからまだまだです。」と答えました。また十日が経ち王様が訪れ「もういいか？」という「まだまだです。先に仕掛けることはなくなりましたが、他の鶏が仕掛けてくると間違いなくそれに巻き込まれてしまいます。だからまだまだです。」と答えました。

さらに十日たち王様が訪ねて「もういいか？」と聞くと「もういいでしょう。どんな鶏が仕掛けてきても、まるで木彫りの鶏のごとく微動だにせず、相手を睨み付けてだけいます。すると相手が後ずさりして逃げ、闘わずして勝つようになりました。」

自分を制して争いをこらえるのは難しいことです。そして自制ができて相手も仕掛けてきたときそれをこらえるのはもっと難しい。この故事は、相手の作った土俵に引きずり込まれることなく、闘わずして勝つ境地について語っています。しかし、こうした内実を備えるのはたやすいことではありません。平和の本質はどのようにして創らなければならないのでしょうか。

まずは、平和を想像することができなければならないでしょう。次に、平和を創ることを実践することでしょう。しかし、平和を創るだけでは充分ではなく創った平和を守らなければなりません。それでも充分ではなく、それを強化しなければなりません。でもそのために行動してみると、外向けの闘いが続くので内側の平和が壊れることがあります。論語の中で孔子は次のように言っています。「知ることは好むことに如かず。好むことは楽しむことに如かず。」知ることは知識を持つことです。好むことは知ったことをもとに行動することです。楽しむことは知ることと行動することが身に着いた状態を言います。平和を楽しむ者は無敵である。私たちがこうした内実を備え持つなら、闘わずして勝つことができるようになると信じます。

皆さんの闘いが、より多くの経験と教訓を創りだし、光り輝く勝利を抱くことを切に望みます。

(訳文責：大村)